



100周年祝賀晩餐会で挨拶する平山善吉会長

日本山岳会創立100周年 記念式典を終えて

10月15日の記念式典で、100周年事業も8割を終えた。その成果などを、実行委員長の平林副会長に報告してもらった。

平林克敏



2005 年 (平成 17 年)
12 月号 (No. 727)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

日本山岳会創立100周年 記念式典を終えて……………	1
第37回新入会員オリエンテー ション開催……………	4
100周年記念事業 会員並びに 有志募金の御礼とご報告(8)……………	5
トモルティ峰初登頂……………	6
洋書名の表記について……………	6
報告……………	8
事業委員会・自然保護委員会 協賛/図書委員会/資料映像 委員会/事業委員会/科学委 員会/自然保護委員会/山想 倶楽部/緑爽会……………	13
Climbing & Medicine……………	13
図書受入報告……………	14
東西南北……………	14
赤い表紙の『山日記』回想/15 番目の8000 ^{メートル} 峰/名誉会員で ない三先輩……………	16
図書紹介……………	17
会務報告……………	18
新入会員……………	19
ルーム日誌……………	19
会員異動……………	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時
年末年始休室・12月29日~1月5日

100周年事業に向けて

今から10年前の創立90周年式典の
おり、100周年を迎える日本
山岳会の抱える長期的問題として
「海外登山のあり方」「環境問題」
「中高年問題」などが検討され、今
日に受け継がれてきた。

2001年春、100周年事業
企画委員会を発足した。その中で、
記念事業の根幹をなす考え方とし
て、「全員参加」「将来に残る事業」
を基本理念として、100周年を
いかに表現するかを、登山事業と
山岳文化の両面から検討・実施し
てきた。

登山事業について

東海支部の冬季ローツェ南壁登
山隊(2004年冬)を100周
年事業として支援したが、惜しく

も8250^{メートル}地点で敗退した。

学生部のムスタン登山隊チービ
ヒマール(6650^{メートル})、サリブ
(6328^{メートル})の登頂には5人の学
生が取り組み、みるべきものがあ
ったと評価したい。

関西支部創立70周年記念事業の
西チベット学術登山隊は、600
0^{メートル}峰2峰初登頂の成果をあげた。
また、これまで未解明であった河
口慧海の越えた峠クン・ラを確定
し、峠越えのあと、最初に立ち寄
った白巖窟を特定した和田豊司学
術隊長はじめ、大西保隊長とその
隊員の果たした功績は大きい。

その他、各支部が送り出した登
山隊もそれぞれ立派に成功を収め
ることができた。登山全体につい
て言える事だが、これまで当会が
実施してきた海外登山とは大きく



中央分水嶺踏査で、南端の佐多岬に到着した宮崎支部

異なる時代の流れが、それぞれの登山隊に見受けられる。このことは、山岳会の次なる時代への対応の難しさを示す一つの事例であり、当会の抱える大きな問題の一つと言えよう。

記念トレッキング

企画立案の当初、かつて日本人が辿った数々の足跡を訪ね、先人の偉業を偲ぶ旅を想定し企画した。会報に告示した12のコースのうち、6コースが遂行され、約50名が参加した。「河口・慧海の足跡」「マナスル初登頂の足跡」などを最後にこの事業を終了する。当初の期待に反し、平均年齢64歳の当会会員には、少し足の重いプロジェクト

であったと思われる。

国内登山「中央分水嶺踏査」

中央分水嶺踏査は、支部をあげての「全員参加」に最もふさわしい一大イベントとなった。

「山岳会創設の頃と同じように地図とコンパスと五感を駆使して藪をかき分け、荷物に汗して目的地を目指す……」とは某支部長の言葉である。

宗谷岬から佐多岬まで全長4480⁰の約90⁰、4000⁰を11月末までに踏査した。25支部と、首都圏の同好会も加わり、踏査日数延べ757日、参加者数延べ3930余名にまで発展した。

GPSによる位置測定、三角点の保存状況や地図との相違点など、「国土地理」はじまって以来の調査となり、来年中に報告書を作成予定である。

この計画の当初(2002年秋)、周辺の山々をよく知り尽くしている支部長から困難視する声も多く聞かれたが、よくぞここまでやり遂げたものだ。筆舌に尽くし難い苦労があったものと思う。

山岳文化事業「百年史」刊行

1994年10月に百年史編纂に向けた小委員会が設立され、10年を越える歳月を経て、完成しようとしている。

当会の歴史を多角的側面から解明する本編上巻と、登山史的な論考および資料を含む下巻の2分冊から成る。各編350(400)程度を予定している。その概要が百年史委員会から11月理事会で報告された。伝統の原点を掘り下げ、今日にいたる当会活動の歴史を中心に、会の枠を超えた流れをも網羅した力作となろう。

心血を注ぎ本誌の執筆に携わる委員会の方々に、多くの会員と共に敬意を表したい。

『新日本山岳誌』発行

日本全国4000山の情報を集めた本誌は、10月上旬に完成。ナカニシヤ出版(京都)から発行され、記念式典にその第1号が展示された。当会発起人の一人である第2代会長の高頭仁兵衛が、1906年に独力で書き上げた『日本山岳志』から100年目となる本誌は、他に類を見ない大作となった。

25支部、約500余名がこの作業にあたった。編集委員長を務め、

提案者でもある高木泰夫会員に敬意を表したい。

その他の刊行物

『英文ジャーナル、100周年記念号』はすでに執筆の大半を終えた。約300⁰、カラー50⁰を含む本格的な英文記念号。1500部を来年5月に発行する。

図書展委員会編纂の「所蔵山岳図書・絵画展目録」は当会が誇る外国語図書を中心に、貴重な和書も加えた立派な目録で、丸善での展示会も大好評であった。事情があり、東京以外の地域で開催できなかったことが残念であった。

この他、『写真で見る日本山岳会の100年』も、資料映像委員会(羽田栄治委員長)を中心に作業にあたり、滑り込みで式典に間に合わせてくれたが、古い写真を収集、編集する事にはかなりの苦労があったと思う。

シンポジウムと記念フォーラム

医療委員会のシンポジウム第1回「山での突然死を考える」、第2回「山での救急蘇生を考える」が行なわれた。講演会内容を収録したCDは山岳会員のみならず、山

好きな方々にも広く参考となるものとなった。

記念フォーラムとして、若手パネリストによるシンポジウム第1回「日本山岳会のこれからを考える」を開催。このなかでこれまで日本山岳会が主催した幾多のヒマラヤ登山を検証し、次の一世紀に向けての問題を探究した。引き続き「日本山岳会と登山の未来に向けて」と題する第2回シンポジウムを、2月11日に日本青年会館において開催予定である。

その他、フォーラム委員会の活動は広く、会員有志の海外登山やトレッキング活動を支援し、各支部で実施中の国内記念登山等を管理し、今日に至っている。

自然保護と森づくり、支部式典

9月9・10日、高尾の森わくわくビレッジで開催したシンポジウム「森と人間の共生」では、自然保護全国集会を持った。そのなかで「日本山岳会自然保護活動指針」が検討され、1992年に作成した指針を見直し、今日的観点から考えた全会員が共有できる具体的な活動指針を明記、採択した。

森づくり活動では、白神山地ブ

ナ林再生事業(青森、高尾の森づくりの会(東京、猿投の森づくりの会(東海))を100周年事業として認定した。それぞれ記念事業を実施、一般市民や民間企業関係者も参画した「森を護り、再生する事業の先達」として、社会的に大きな評価を得ている。

支部式典は8ブロックに分けて挙行された。5月28日の東北ブロックを皮切りに、11月5日の関西支部式典をもって終了した。参加人員は延べ875名、それぞれ蘊蓄に富んだ興味深い講演が行なわれた。

記念式典・祝賀晩餐会

海外の招待者19カ国21団体に招待状を送ると共に、100周年を



森づくり活動で活躍した高尾の森づくりの会

伝えるグリーティング・カード500枚を各国に送付した。当日はシンガポールで開催中の国際山岳連盟の総会と重なり、出席国は10カ国28名となった。

記念式典当日の講演会には1030名が出席した。山田二郎前会長と山野井泰史氏の講演は、山を知る会員にとっては示唆に富んだものであった。

祝賀晩餐会は、皇太子殿下はじめ国内外の来賓54名をお迎えし、総勢977名の出席を得て、盛大に挙行することができた。会場での殿下は、たいそうお寛ぎのご様子であった。

会場に展示した「写真で見える日本山岳会の100年」のパネルは印象に残るものが多く、殿下にもご覧いただいた。

海外からの来賓を迎えての前夜祭や、翌日の日光へのエクスカージョンも良い交流の場となった。

この式典と祝賀会を挙行するまでは、多くの問題や反省が残るが、結果が全てを補って、余りあるものとなった事が幸いである。

残る事業の進捗

『百年史』の発刊、『英文ジャーナ

ル』の発行、「中央分水嶺踏査報告書」の刊行物については、次期総会から少なくとも上・中期の発行をめどに鋭意進行中である。

「マナスル登頂五十周年記念(2006年5月9日)の諸事業、学生部のネパール・ヒマラヤ、マナスル山群のパンバリ・ヒマールへの遠征が計画されている。

式典を終えて(謝辞)

国内外の来賓の方々をはじめ、会員の皆さまに多数ご出席いただき、100周年記念式典を挙行できたことにお礼申し上げます。

ひとくちに100周年と申しませんが、創立から今日に至るまで、先輩方が積み重ねてきた足跡の大きき、その重みは語るに余りあります。

ヒマラヤ登山をはじめ、地球の隅々にまでその足跡を印した山岳会の諸活動を長きにわたり、支え、ご協力を賜りました多くの関係者の方々に、感謝の意を表します。

向後は、100年を山と共に歩んできた当会の歴史や伝統と対峙し、新たな世紀に向かって、歩み、努力することを共に誓い、謝辞といたします。

第37回新入会員オリエンテーション

「仲間と山を楽しむために」を開催

総務委員会

―日本山岳会を知ろう―

昨年よりも増加した新入会員

11月19日(土)、第37回新入会員オリエンテーションが日本山岳会会議室で行なわれた。

参加者は34名。会員番号14052番から14206番が対象となり、平均年齢は60代前半で、昨年の参加者30名より多い。

年に80名近くが参加していたころに比べると半分以下になっているが、それでも右下がりになってから増えたのは初めてである。

日本山岳会への入会者数は、1997(平成9)年度の270名をピークに減少し続け、昨年度は133名であった。しかし、今年度は、年度末まで4カ月を残して135名(12月1日現在)とすでに昨年を上回っている。100周年の影響だろうか。

オリエンテーションの概要

オリエンテーションは、筆者の総合同会で進行された。

14時開会、「歓迎のことば」を平山善吉会長が述べた。

続いて、講演「日本山岳会100年のあゆみ」を神崎忠男総務委員が行なった。講演では、小冊子とプロジェクトを用意。会の歴史や、当会と国内外の山岳会との関係、最近の事情などがわかりやすく紹介された。

ビデオ上映では、90周年の時に制作したものを放映。内容的に古くなった部分もあるが、会を理解してもらうには百聞は一見に如かずで、効果は大きく、毎年上映している。

「組織と活動」については、吉永英明常務理事が担当。100周年事業の報告、ホームページや山岳障害保険について述べた。委員会



ビデオ上映で紹介されたマカルー東稜の登頂シーン

と同好会の紹介は斎藤健一総務理事が担当。山岳研究所運営委員会、自然保護委員会、資料映像委員会、アルパインスキークラブ、山岳地理クラブ、山の自然学研究会などの代表が壇上に出て、説明と勧誘を行なった。事務局職員の紹介後、記念写真撮影と図書室紹介を行なった。この記念写真はすぐ現像し、帰るときに渡された。

―自己紹介と懇親会―

自己紹介と意見交換は場所を移し、104号室で行なった。

司会進行は、石光久仁子総務委員。会員番号順に、2分以内のスピーチという条件でスタート。新

入会員からはそれぞれの山との関わりや入会の動機、また山岳会に何を期待をしているのかなどが語られた。

今年もさまざまな山歴、職歴の人たちが入会した。会はさらに多様性に富み、楽しみも増えていくことだろう。何人かのスピーチを紹介しよう(順不同)。

石川恵子さん(14061)

以前は、中高年女性の登山サークルのサポートや、高校で山岳部の顧問をしていました。しかし今は、夫と月に1回程度、散歩のように入会しています。再び、頑張った! という山登りをしたい。

吉田正隆さん(14112)

同好の士を求めている入会。これまで山のクラブに所属したことはなく、8割が単独行でした。しかし、加齢で単独行が不安になったため、一緒に行く仲間を求めています。

斎藤俊二さん(14189)

山スキーを中心に活動をしてきました。交流の輪を広げることができたらいいと思います。山スキーが好きなので、早速、アルパインスキークラブに入会させていたできました。



100周年記念事業

会員募金並びに有志募

金の御礼とご報告(8)

募金委員会

左記の大学、会員より募金をお寄せいただきました。大学名、会員名を記載し御礼とさせていただきます。

1. 大学募金 (1校)

順天堂大学

2. 有志募金

10万円以上 (1名)

山田二郎

3. 会員募金

9千円 (6名)

平田大六、竹島正義、溝口洋三、

福田澄子、畠山勉子、畠山勝

(敬称略、11月末現在)

金中和美さん (14090)

会報「山」を読んで活動を知り、すばらしいと思い入会。山スキーに挑戦したいと思っています。

和田正昭さん (14050)

今の百名山ブームはどうかと思いますが、自分は深田さんが百名山を書いた頃に、百名山をやり始め、99座を登りました。これから百名山以外もやっていきたいと思っています。

内山哲司さん (14120)

深田クラブに所属しています。

百名山を今年の5月に完登し、現在は三百名山を目標にしています。増山秀樹さん (14097)

高校の教員。高校時代に山岳部において、歴史が好きで、明治期の山岳関係の本を読んでいて、憧れをもっていました。最近は登れなくなってきましたが、頑張りたいたいと思っています。

松田展夫さん (14083)

皆さんを本場アルプスに案内したいと考えています。ヨーロッパアルプスに興味を持ち、アルプスの本を翻訳したのが入会のきっかけです。

長瀬秀史さん (14092)

山スキーから登山、なんでもや

り、年間で70日間は山に入っています。体力に自信があるので、何かお役に立てればと思っています。渡部展雄さん (14064)

福島県から来ました。自分は50年間、遭難救助の仕事にあたってきました。低山しか歩いたことがないので、入会してよかったのか……と思っています。

金邦夫さん (14160)

警視庁山岳救助隊として奥多摩に10数年勤務しています。皇太子殿下に、何度かお言葉をいただいたのが動機で入会。奥多摩では今年5人が死亡、1人行方不明。五日市と高尾を入れると、東京の山だけで8人ぐらいが死亡しています。皆さんも気をつけて下さい。

懇親会

懇親会は、再び会場を会議室に移し、上野美裕総務委員の司会で、行なわれた。

会場は新入会員と役員、委員会や同好会の委員などで混雑した。テーブルには差し入れも並び、賑やかに進行。新しい会員と古い会員が入れ混ざり、大いに親睦を深めたようであった。

田邊壽副会長の挨拶で閉会となる。(永田弘太郎)



第37回新入会員オリエンテーション参加者の皆さん

トモルティ峰(4888^{メートル})初登頂

防衛大学校山岳会 福楽 勲

防衛大学校山岳会は山岳部創部50周年記念行事の一環として、2005年夏、登山と登山隊BC訪問を日程に入れたシルクロード探査トレッキングを実施した。

18年ぶりの海外登山であり、気持ち新たに、力量の限界を確認しながら山の選定や諸準備を行なった。結果、目標の山は未踏峰で氷河が発達している、天山東端に位置するトモルティ(托木尔提)山群の最高峰トモルティ(4888^{メートル})に決定。トモルティ峰は、新疆ハミ(哈密)の北東約70^{キロ}に位置する。頂上はテーブル状の雪氷原となっており、頂からは、東西南北の方向それぞれに数キロの氷河が流れ出している。

登攀ルートを決めて04年夏、高橋宏一郎が偵察を実施。その結果、トモルティ峰山塊の南側のカザンタブテ谷から入山し、主峰から南西へ流れる氷河を登攀ルートに選定した。

2005年8月9日、登山隊は、最奥の集落バダシ(八大石、約1800^{メートル})から馬(隊荷はラクダに搭載)で約3400^{メートル}の草地にBCを設営。天候は入山後やや安定した状態となる。BC周辺は羊や牛の放牧地であり、開花したエーデルワイスをはじめとする高山植物を見ることができた。この山域は、夏に降雪、融雪が多く、冬は寒気が厳しいが、降雪量は少ない大陸型氷河帯と言われている。ヒドンクレパスもあり、デブリも何箇所か望見された。

8月12日、BCからモレーン、氷河を遡上、無数のクレパスが縦横に走る氷河をコンティニュアスで慎重に通過し、約4200^{メートル}の氷河上にC1を設営。

8月15日、5時起床。気温はマインス9度、快晴。高橋、香月の2名はC1を7時に出発。起伏の少ない氷河上をクレパスに注意しながら登高する。頂上までの高度



C1からのトモルティ峰(中央)

差は約700^{メートル}である。数箇所のデブリを避け、約4400^{メートル}付近から斜度約50度の氷雪の斜面をスタカットで登攀する。

15時40分、初登頂に成功(GPS高度4892^{メートル})。その瞬間、目頭に熱いものを感じた。山の北側からだんだんと雲が迫ってきた。

16時20分、下山開始。21時15分、C1に着いた。C1から頂上までの所要時間は8時間40分であった。【登山隊 隊長 福楽 勲(57歳)、隊員 高橋宏一郎(43歳)、香月寛之(25歳) 期間は05年8月7日、8月20日】

洋書名の表記について

— 日本山岳会創立100周年記念

『所蔵山岳図書・絵画展目録』を見て—

松崎中正

丸善の会場に行くチャンスを得て残念だったが、立派な『目録』はマニアにはこたえられない。そこで感想をちょっと。

洋書の部の書名の表記について

は、例えば、23番のウェストン著 *Mountaineering and exploration in the Japanese Alps* の場合、英語では、*exploration* の語頭の *e* を大文字にするのが普通だ。

24. The playground of the Far

East 25. Himalayan journals
も、英語の書名としては見慣れない。フランス流といえようか。

ところで、ウインパーの「アルプス登攀記」については、「Scrambles amongst the Alps」(浦松佐美太郎訳、岩波文庫の初版の解説)と「Scrambles Amongst the Alps」(福田陸太郎訳、朋文堂「世界山岳全集」1の解説)とが見られる。Amongstの語頭はsmallかcapitalか。浦松さんも考えたのかもしれない。改訳版の扉の裏は、SCRAMBLES AMONGST THE ALPS
とうまくかわしている。

なお、『目録』7番の書名に誤植! 1869+69。

薬師義美さんのあの気が遠くなる資料「ヒマラヤ文献目録」は、さすがに整然たるものだ。

結局、洋書名を書くときには、この本や水野勉さんの『ヒマラヤ文献逍遙』のようにするわけだが、気もめめる。だから、なまじ大文字小文字で悩むよりは、原著の扉にある様式で、いわば台帳通りに、全部大文字だったら大文字だけでspell outしてしまうのはどうか。扉は正式な書名であると同

時に、いろいろと工夫を凝らした一種の飾りでもある。副題がついている場合は、やっかいだが……。3番のハドソンとケネディの著書のように、ゴシック体の文がついているのは、さあ、大変だ。

一般的に、冒頭の語と固有名詞とは大文字で始めるのは当然として、名詞、形容詞も大文字で、冠詞、接続詞、前置詞などは小文字で、となる。Amongstのように、長い前置詞は大文字で始めるほうが座りがいいとの判断もありそう

だ。
ついでに、「日本山岳会蔵書之印」はだれの作か知りたくなるが、印泥も安っぽくなくてよかった。ただ、せつかくの貴重書に無造作な押印が見られるのは惜しまれる。デザインに神経を使ったタイトルページは、ぜひ大切にやりた



日本山岳会創立百周年記念出版

◎JAC会員特別割引期間
締切せまる!



日本全国四〇〇〇山の
情報を網羅!

好評発売中!!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

折沢・国後など北方四島の山から、
南西諸島の山々まで、日本全国の山
に登った、撮った、調べた、そして
書いた。日本山岳会の全国25支部
約500名が総力をあげて編集執筆に
あたった最新・最大の山岳百科が
ついに完成!

△推薦のことば△
日本山岳会二代会長高頭
式氏による『日本山岳誌』
から百年、山岳の現況を
記述し後世に残すべく、
百周年記念事業として本
書ができました。
日本山岳会会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>



『きりぎりす16号』 発行のお知らせ 青年部

国内外で精力的に登山をしている人々向けの冊子『きりぎりす16号』を発行しました。2005年2月~10月初旬までの山行報告です。

おなじみのH.A.M IIレポートや、山スキーと沢登りの国内の記録を中心に、冬壁やオーストラリアの山行報告などが盛り込まれています。

* ルームおよび一部の登山用品専門店にて、委託販売しています。

* 現在、人手不足のため郵送販売には応じておりません。

* 定価 1部 280円~

報告

12月

Report

日本山岳会の各委員会、
同好会の活動報告です

事業委員会・自然保護委員会協賛

100周年記念懇親山行 「景信山から高尾の森へ」

創立100周年記念式典および祝賀晩餐会は、皇太子殿下はじめ各国からの来賓をお迎えして、盛大に開催された。

翌日の懇親山行は、あいにくの雨にもかかわらず、全国からの110名を超える参加者が、景信山に登った。11時頃、頂上に集合した参加者は記念撮影後、委員の案内で高尾の森へ向けて下山を開始した。

私たちが案内された場所は、この「高尾の森づくり」を最初に手がけた2001年の植栽地であった。4年前に植樹された苗木は確実に成長していた。植樹帯は急斜

面であるため、作業する難しさ、安全に配慮しながらの植栽など、大変な苦勞があることを知った。夏の炎天下での地こしらえ、下草刈り、動物や昆虫による被害への対処などの解説が印象に残った。多くの自然災害と対峙しながらの活動から、この作業に携わる皆さんの真摯な姿を垣間見て、感動した。

何箇所かの植樹ポイントを見学した後、広く小奇麗な小下沢ベースへと移動。事業委員会と自然保護委員会と「高尾の森づくり」のスタッフが豚汁で迎えてくれた。心づくしの豚汁は、雨と汗に濡れた体には格別な味で、思わずお替わりする会員もいた。昼食後、会員同士の懇親と歓談で、賑やかな時を過ごした。その後、記念撮影をして解散となった。



100周年記念懇親山行（小下沢ベースでの集合写真）

前日の記念式典・祝賀晩餐会、雨の中の記念山行など、多くの会員の方々と懇親を深め、思い出を胸に信州の我が家へと向かった。最後に、この記念山行を企画された事業委員会、自然保護委員会、そして「高尾の森づくり」の関係者の方々に感謝いたします。

（宮原岳子）

図書委員会

100周年記念

「所蔵山岳図書・絵画展」

創立100周年記念の「所蔵山岳図書・絵画展」が、丸善・丸の内本店4階ギャラリーで、10月8日から17日まで開催された。

展示図書のうち、和書は原則として戦前の山岳名著、稀観書をおおむね初版本で展示し、本会の歴史的メイン・イベントとなったマナスル初登頂に関するものを中心に数点を加えた。

洋書は原則として、エヴェレスト初登頂までの山岳図書の古典、名著を選び、これに8000メートル峰の初登頂の記録を加えた。

現在、本会が所蔵する図書は、和書約1万1200冊、洋書は約8800冊である。この中から和書65点（約100冊）、洋書54点（邦訳書を加えて約100冊）を厳選し、G・ケースに並べ展示したが、本邦随一の山岳蔵書数を誇る本会ならではの、面目躍如の壮観な展示となった。

絵画は16点を展示したが、会場にいつそう華やかな彩りを添えた。



盛況であった展示会の様子

本会所蔵の絵画は、別途大規模な絵画展を開催するのも良いのではないだろうか。

開催期間中の来場者は3608名で、1日平均約360名の来場があり、とても盛況であった。開催初日、NHKテレビで展示会のこと放映され、それを見て来場した方も多かった。来場者の中には、志村鳥嶺氏の曾孫にあたる山本恭子さん、茨木猪之吉氏の長男の岳人さん、播隆上人の槍ヶ岳登山の協力者の子孫の岩岡健治さん、足立源一郎氏のご子息夫妻などの姿もあった。

図書室の奥深く眠っていた当会の素晴らしい古典に日の光を当て

会員や一般の山岳書愛好家に、これらの書籍を紹介したい、という我々の目的は果たせたと自負している。ただ少し気がかりなのは、会員よりも一般の来場者が多かったと思われることである。

作成した『所蔵山岳図書・絵画展目録』(カラー、80ページ)も好評であった。

目録は残部わずかだが、事務局に申し込みただけは送付いたします(頒価1000円+送料)。

(田村俊介)

資料映像委員会

第9回全国山岳博物館等連絡会議

11月5日、本会集会室において「全国山岳博物館等連絡会議」を開催した。当会と関係のある博物館や美術館関係者との交流を深めるため継続して行なっているもので、9回目となった。

連絡会議には、市立大町山岳博物館をはじめ12の館の関係者が出席、中野守久委員の司会で進行了。まず資料映像委員長の筆者が「日本山岳会は100周年を迎え

ました。伝統ある歴史を証明するのは所蔵されている数多くの資料です。それらを今後どのように維持管理していくか、皆さんの協力と示唆をいただきたい」と挨拶。

続いて、それぞれの館が近況や運営状況について報告、情報の交換を行ない、ネットワークの構築について話し合った。席上、話題となったのは「指定管理者制度」であった。これは、公共施設の管理や運営に民間参入を認めるというもの。その適用は、博物館、美術館関係者には、今後大きな課題になってくるという。

さて、本会の所蔵する貴重な資料のほとんどは、諸先輩や元会員



連絡会議で活発にディスカッションする参加者

からの寄贈によるもので、年々増加の傾向にある。したがって、それら資料のすべてを委員会が管理することは、スペース的にも限界が生じる。そこで現在、一部の資料を博物館や美術館に寄託するなどの策を講じてきた。館の企画で一般公開するなど、委員会との相互協力の関係を図ってきた。

今後も館との連携を保ち、協力やアドバイスを受けながら、貴重な資料の維持管理に務めていきたい。連絡会議の果たす役割は大きいと改めて感じた次第である。

(羽田栄治)

ネパール・ヒマラヤ アンナプルナ・ゴラパニ
シャクナゲとタトパニ温泉トレッキング
 ベストシーズンのゴラパニ。ネパール国花のラリダラス(石楠花)がぎっしりと、山がピンクに染まります。
 3月19日(土)~3月28日(月) 10日間 ￥268,000
Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
 〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
 電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

事業委員会

韓国雪岳山紅葉山行

恐竜稜への夢がかなう

17年前の冬、華彩峰に登り、西方に聳える岩峰鋭い恐竜稜に登りたいとの思いを抱いた。その夢がついになかった。

10月6日、22名がソウルに集結空港で、ガイド役の韓国登山アカデミー代表の李さんと、山岳会の方々の出迎えを受け感激した。

7日、寒溪嶺からの登山初日は生憎の雨であったが、ガスの切れ間から全山紅葉の山々が時折姿を見せる。先頭は李さんと韓国山岳会の女性陣、後ろには山岳救助隊員の青年達と、万全の備えである。登り口から急勾配の階段に息切れるが、高度を上げるにつれて真紅の紅葉樹林に包まれていく。大青峰・中青峰を経て、長い鉄製のハシゴを下りきった所が今夜の宿泊地、喜雲閣山荘である。ようやく雨も上がり、石造りの小屋(8畳程度の半2階)で休息する。

この山荘は自炊が原則であるが、韓国山岳会のご好意で、手作りの夕食となる。外での食事は寒かつ



雨あがりの「馬登嶺」にて

たが、韓国ラーメンとマッカリで芯から暖まる。李さんから「明日は晴れます」との明るいニュースに歓声があがる。韓国山岳会の安さんが、歌と踊りで和ませてくれ、楽しい夕食会になった。明日は核心部の恐竜稜線である。狭いがオンドルの効いた小屋で重なるように眠る。

8日、薄曇りではあるが、時折青空がチラリとのぞく。恐竜稜線へは、峻険なアップダウンの岩峰の連続である。奇岩と紅葉の織り

成す絶妙なコントラストに魅せられながら、疲れも忘れて歩く。

1275峰では、フリークライミングに挑戦。岩を攀じ登り、頂に立つ。周囲360度の眺望からは、踏み跡を残した大青峰と中青峰、それに遠く日本海も望めた。峻険な岩峰群を目に焼きつけ、飛仙台へと下る。

港に面した束草では、海鮮料理の夕食会で、これも楽しいものとなった。李さんが、一人ひとりにマッカリを酌し、山の歌も披露してくれた。そのしつとりとした素朴な優しさが心に残った。

最後に、サポートしてくださった韓国山岳会の皆様に紙面を借りまして「カムサハムニダ」、有難うございました。(竹原隆義)

ソウルにて40年ぶりの交歓

ソウルでの慰労会に、本会の名誉会員でもある孫慶錫氏が同席された。孫氏とは、奇しくも今回参加している朴元鍾徳、鳥居和雄、斎藤健一が、40年前(1965年)のJAC創立60周年記念行事で交流があった。

3名は、「訪日韓国山岳会登山隊」として、北アルプスを初めて



孫慶錫氏を囲んで40年ぶりの交歓(右端が孫氏)

訪れたメンバー9名と、そのリーダーであった孫氏と、穂高・槍ヶ岳に同行していた。

記念行事前に織田信彦氏より連絡を受け、折井健一氏のもとに伺ったところ、穂高・槍ヶ岳へ同行するようにとの指示であった。

席上、孫氏の記憶は素晴らしく冴えていて、日本語も巧みであった。その孫氏の口からは、40数年前の前穂高、槍の登山の話、JACのそうそうたる方々の名が、次から次へと出て、恐縮と驚嘆しきりであった。

40年ぶりの旧交を温めながらの日韓登山談議は、ソウルの夜が更けるまで続いた。(朴元鍾徳)

科学委員会

公開セミナー

「最近の山岳通信の発展と応用」

11月5日、飯田橋・東京しごとセンター地下講堂で公開セミナーを開催、65名の参加者があった。

ヒマラヤ遠征隊のような大きな登山隊から、個人の山行にいたるまで、山岳通信は登山の戦術や安全確保、あるいは遭難救助にきわめて重要な役割を占める。

1 番目の演題は、本会会員の芳野起夫氏が「わが国の山岳通信の発展の概要」と題して、山岳通信に使用できる通信機器の進歩発展の歴史を解説した。もともと山岳通信専用の機器というものは存在せず、軍用の通信機器を転用したのである。大きい、重たいという属性を、登山用に小型、軽量化していった歴史がある。

その歴史の中で、真空管から半導体への転換は通信機器を根底から変えてしまうほどのドラスチックな変化であった。現在使われている登山用の通信機器の中で、実質的に一般登山者に有用な通信手

段は、携帯電話と衛星携帯電話の二つであると思われる。

2 番目の講演は電気通信大学助教を務める富澤一郎氏が、「GPSの原理と使用方法」を専門家の立場から講演した。自分の位置を知るための通信機器として、カーナビ、船舶用などに広く用いられているGPSは、人工衛星とか電波といえは難しく思えるが、実際は測量点を宇宙に持っていたただけで、基本は三角測量であると解説した。

3 番目は再度、芳野氏が、「山岳地における携帯電話の利用」というテーマで講演した。携帯電話の普及は、およそ国民一人あたり1台になるといふ。だが山岳地では基地局が遠い、見通しが悪いといった理由で接続できない地域が多い。また、バッテリーの消耗も激しいことに注意する必要がある。

最後に本会理事の古野淳氏が「海外登山における衛星携帯電話の使用法と運用手続き」について講演された。極地、高山、未開地などでは衛星携帯電話が実質唯一の通信手段となっている。特別な設備を必要としない衛星携帯サービスには、インマルサット、イリ

ジウム、スラーヤ、エイシス、グローバルスター、Nスターなどがある。いずれも民間のサービスであり、使用料、カバー範囲など違いがある。また、サービス停止という危険性もある。通常の携帯のように山岳地に入ったら使用できないという欠点はない。日本国内での使用も始まり、性能は良いが問題は使用コストであろう。

なお、講演内容の資料集は残部があるので、科学委員会まで申し込みいただければ有料で配布します。(箕岡三穂)

自然保護委員会

上野村シオジ原生林自然観察会

9月3日、上野村を参加者15名で訪れた。この日の山行は天狗岩までの往復約2時間の行程。残暑厳しい折りだったが、途中までの沢筋は涼しく気持ち良かった。頂上からの眺望はガスのため視界はなかったが、晴れていれば西上州の山々が一望できるそうだ。

夜は上野村在住で哲学者の内山節立教大学教授にご講演いただいた。先生は森林ボランティアのネ

ットワーク組織「森づくりフォーラム」の代表で、日本/秩父/上野村の森と人間とのかかわりについて、歴史や森林利用などの視点からお話くださった。破綻した人に対する「山上がり」という落伍者を出さないための豊かな森、多様な社会に支えられたかつて山村に存在した共同体の仕組みなど大変興味深い話であった。

翌4日、三岐出発8時30分。沢の冷気と夏なのに新緑を思わせる森の輝きと栃の実の落ちている道は本当にすばらしかった。

唯一の難関は3回の沢渡りだった。



個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千代山通5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



た。橋の代わりの木が流されていたり、滑りやすかったりしたが、2時間ほどでシオジ原生林入口に到着した。原生林は北沢の栃平沢と細尾沢の分岐から沢を挟むように奥に広がっていたが、入口から先は保護区で立ち入り禁止。目についたシオジの木は余り大きくはなかったが、木漏れ日の中で新緑を思わせる明るい森であった。

(山本信之)

山想倶楽部

劔岳、黒部川山行

9月2日、劔山荘に参加者9名が集合。

3日、6時20分出発。雲が多く、遠くの山は霞んでシルエットだけが見える。武蔵のコルから見ると劔は、急峻な壁のようで圧倒的迫力だ。その中を大岩に向かう人の姿はアリのようだ。ザクザクの道を息をきって登り、いよいよ岩場の連続へと入る。三点支持で緊張しながら、数箇所の鎖場を通過すると、核心部のカニのタテバイだ。下から見ると簡単そうだが、いざ取り付いてみるとやはり怖い。下



劔岳山頂にて

を見ないようにして通過する。劔岳山頂(2998m)へは10時40分到着。昼食後、祠に山行の安全を祈り下山にかかる。

下りの難所はカニのヨコバイだが、ここからはカニのタテバイの登り口が見え高度感がある。最初の一步は鎖を頼りに大きく足を下ろすが、なかなか届かない。2年前はもっと簡単にクリアできたのに……。劔山荘、劔沢雪渓を経て真砂沢ロッジへは17時15分到着。4日、5時10分出発。二股からは仙人新道の登りである。荒れたガレ坂と谷沿いの道を仙人温泉小屋に向かう。谷の斜面に咲くトリカブトなどの花々に気が和む。湯

煙が見えると、仙人温泉小屋である。阿曾原峠への雪渓は、シュールンと大きく口を開け崩壊が激しく、本谷の出合近くまで下った。

最後は、ロープで20m程垂直下降し、谷を渡る。阿曾原温泉小屋へは18時頃到着。

5日、6時40分出発。昨夜の雨で谷にガスがかかり、水平歩道は霧に包まれていた。幻想的なブナ林と、垂直に切れ落ちた断崖が続く。行く手には尾根が黒部溪谷に幾重にも流れ込み、その間をガスがゆっくりと流れ、水墨画を見るようであった。

(長井純)

緑爽会

山岳画家

「茨木猪之吉を語る会」

山岳会草創期メンバーの一人として数々のエピソードを残した茨木猪之吉。彼の画業と生涯を語る会が、9月29日、本会集会所で開催された。参加者は53名、盛会であった。

ゲストは横山駒子(猪之吉次女)、茨木岳人(同長男) 姉弟。講師は猪之吉研究では第一人者とされる

犬塚幸士氏と、作家の近藤信行会員。そこへ猪之吉のただ一人の弟子といわれる吉村唯七の遺族6人が、はるばる中津川から参加され驚いたり、喜んだり。

会は松本恒廣会員の司会で始まった。まず茨木家の姉弟が挨拶、次に近藤会員が「山岳会における茨木猪之吉」を紹介し、続いて犬塚氏の講演に入った。

その中で、小島鳥水をはじめ多くの人に愛された彼の人となり、絵画・画帳に残る彼の業績、安曇野の斎藤家との関わり、上高地ウエストン像撤去の真相、小諸における若山牧水との出会い等々、昭和19年秋、白出沢で忽然と消息を絶つまでの彼の人生が語られた。

終了後、会場に飾られた猪之吉の自画像に向かって、甲府・大澤酒造の「太冠」で献杯。大澤伊三郎(元山梨支部長・故人)宅は、猪之吉の甲州での滞在先であった。この日のために、酒好きの猪之吉が飲んだであろう昔の味に近いものを用意した。

その後、茨木家と親しい三浦優氏が、猪之吉の青春時代を偲んで「小諸馬子唄」をしみじみと聞かせてくれた。

(近藤緑)

Climbing & Medicine · 51

除細動器(AED)と 山中での電気ショック 野口いづみ

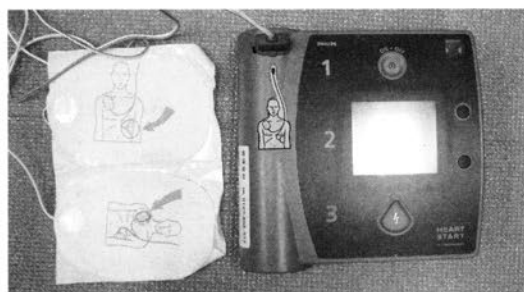
最近、新聞やTVなどのマスコミで、心臓に電気ショックを与える除細動器が扱われているのを目にする。これは正確には、“自動体外式除細動器”(Automated External Defibrillator)のことで、英文の頭文字をとってAEDと呼ばれる。“心停止”という、心電図の波形がフラットになってしまうことをイメージしやすいが、突発的に起こる心停止は、心臓が小刻みに痙攣を起こして、ポンプ機能を失ってしまう“心室細動”と呼ばれる状態の場合が多い。この痙攣状態の心臓に直流電流のショックの一撃を与えて、正気づかせようというのが除細動(電気ショック)である。

除細動器は以前からあったが、AEDの新しい点は、電極を胸に貼り付ければ、電気ショックが必要な状況かどうかを、自動で解析し、教えてくれるということにある。専門家でなくても除細動の必要な事態がわかり、ボタンを押せば除細動ができる。昨年7月に法改正され、一般の人でもAEDを使った除細動ができるようになった。欧米に比べて日本での普及は遅れていたが、やっと普及し始めたというところである。

心室細動を起こした場合、電気ショックが1分遅れると救命率が7~9%ずつ低下するので、一刻も早い電気ショックを行なうことが必要である。AEDは小型になったとはいえ、現在の機種は1.6~3kgあり、登山時の携行には負担になる重さである。一層の小型軽量化が期待される。

先日、筆者は山岳マラソンに医療班として参加した。レース開始の18時間後に意識不明者が発見されたが、ヘリは悪天候のために飛ぶことができなかった。呼吸停止の続報も入ったので、現場に医師団が駆けつけた。現場到着時、発見者の人工呼吸によって患者の呼吸は不安定ながら再開していた。消防署員による搬送下山が開始されたが、搬送開始45分後、AEDが心室細動を告げた。除細動のボタンを押すと、心拍が再開した。傷病者は下山後、病院に移送されて回復し、社会復帰した。

AEDの効果を目の当たりにした1例であった。



AED (自動体外式除細動器) の本体と電極 (左)

図書受入報告 (2005年11月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
寺田政晴	夜景を楽しむ山歩き	142pp/21cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
石井昭子	一人がいい。マイカー花の山旅——関東甲信越70路	263pp/19cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
山森欣一(編)	雪の住処に憧れて——野沢井歩遺稿・追悼集	453pp/22cm	野沢井稔(私家版)	2005	編者寄贈
沖允人・沖道子	足利からの山旅(4)	600pp/22cm	沖允人(私家版)	2006	著者寄贈
沖允人・沖道子	足利からの山旅(5)	499pp/22cm	沖允人(私家版)	2006	著者寄贈
酒井敏明	世界の屋根に登った人びと(叢書地球発見 No.4)	204pp/19cm	ナカニシヤ出版	2005	出版社寄贈
小林理樹	秋の匂い	138pp/19cm	文芸社	2005	著者寄贈
千代田火災海上保険山岳部(編)	苗場山——記録との再会	212pp/19cm	岩瀬佐知子(私家版)	2005	宮沢美渚子氏寄贈
三枝礼子(編著)	日本語ネパール語辞典	617pp/22cm	大学書林	2005	著者寄贈
東京白稜会(編)	甲斐駒ヶ岳事典——恩田善雄の覚え書き	486pp/22cm	東京白稜会	2005	発行者寄贈
B.NUpreti & M.Yoshida(eds.)	Guidebook for Himalayan Trekkers (Series No.1)	164pp/22cm	Tribhuvan Univ.	2005	編者寄贈
Harish Kapadia	"Into the Untravelled Himalaya——Travels, Treks and Climbs"	256pp/22cm	Indus Pub.	2005	出版社寄贈

東 西 南 北



イラスト・倉岡啓吉

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)

赤い表紙の『山日記』回想

鈴木正規

日本山岳会編『山日記』は緑色の表紙で1930(昭和5)年に第1号が発刊され、1985年(第50輯)で終刊。

「赤い表紙の山日記」と登山者に愛されたA5判のポケット型で、平均380ページの変色皮製、ひと昔前の「片桐キスリング」の横のポケットに入れるのが、あの頃の常識だった。

ところで、私がその『山日記』を初めて手にしたのは1954年(19輯)だったが、日記欄より記事のページ数をはるかに多い。登山技術、装備、食料、医学、気象、地図、登攀史など、登山に必要な

あらゆる技術、知識の他、特に私の好きな山の書物、山の歌に関する分野までのすべてを収録した山のエンサイクロペディアであった。いわば教科書と山の辞典と読み物を兼ねたポケット日記帳だった。

その『山日記』の中で、私が目を引かれたのは山の書物の欄の『洋書新刊山岳書』であった。

当時はヒマラヤの初登頂と初登攀の黄金時代であり、ヒマラヤの本はやたらと多く、その上、入手するにも数カ月を要した。

山の洋書として初めて買った本は、1950年のモーリス・エルゾグの『処女峰アンナプルナ』と、次にハウストンのアメリカ大陸の『K2 非情の山』と、欧州アルプスの六大北壁登攀のガストン・レビュファの『星と嵐』の3冊だった。しかし、購入の方法が

その当時は分からないため、考察のあぐく、大阪・八尾市に在住の諏訪多栄蔵氏に依頼することにした。諏訪多氏は、私の日本山岳会入会の紹介者であり、ヒマラヤ研究の第一人者でもあった。

諏訪多氏が、大阪の洋書専門店旭屋書店を通じて注文、3カ月もたつてから、船便入荷の通知が入った。その3冊の代金請求書を見てびっくり。4700円(為替レートは1ドル360円)だった。

当時の社会人給与が1万3800円の時代で、私の会社の給与は9500円。すでに私は結婚していて妻子もあり、そんな大金は家中探してもないのが当然だった。

よくよく家人と考えたあぐく、組合の共済を利用し、1年返済の給料天引きで買い求めた。

こうして、私は初めて洋書を手にした。感激いっぱいの書物と『山日記』の思い出である。

15番目の8000メートル峰

岡澤祐吉

また新たに地上に8000メートル峰が生まれたわけではない。ご存知

のラインホルト・メスナーが郷里の南チロル、モンテ・リテ(2181メートル)山上に建設中の「メスナー山岳博物館」、別名「雲上の博物館」を指して、スイスのB・バーンツァフが評しているのである(SAC会報)。

かつてイタリア陸軍が使っていた山上の古い要塞を改造し、メスナー独自のアイデアを生かし、彼の持てるもの全てをこれに投入し、人生の総仕上げを企てているという。さながら彼の第15番目の8000メートル峰登頂を計画しているように見えるというのだ。

まだ完成しているわけではないので、全容は明らかではないが、要塞内の壁面には絵画を飾り、壁面にはさまれたガラス張りの窓からはドロミテの山々を近くに眺めることができ、その様子は素晴らしいという。まさに雲の上の山岳博物館だとバーンツァフは書いている。ある場所ではタウチョがひるがえり、8000メートル峰登山でお馴染みのヤクが何匹か放し飼いにされている。展示室には、氷河で覆われたオルトラ・山群の立体模型などが並び、彼が持ち帰ったヒマラヤ山麓の珍しい民芸品などが

陳列されている。

南チロル、コルチナ・ダンペツツォの南東20^{キロメートル}ほどの所に建設されているこのメスナー山岳博物館が、再び世界的な話題となることを彼自身はつきりと意識してこの終生の作業を進めている、とバーンツァフは書いています。

疲れを知らない極限の登山家、策士、本製作屋、そして自分のことを吹聴して歩く演説屋、などと皮肉を込めて言われても、メスナーはへこたれることを知らない。メスナーはデモーニッシュユだ、

と田口二郎さんは彼を評していた。本会名誉会員でもあったマラーニ氏からもメスナーを高く評価する話は聞いていない。敬虔なキリスト教徒でもあった両氏のこと、当然かもしれない。

ドイツの大学教授、ヘルリッヒ・コッファアーに訴訟を起こされ敗訴したメスナーだが、彼を取り巻く地域は、埒外に出るその行動を非難することなく、むしろ応援しているようにさえ見える。彼の住むイタリアにドイツ語を理解する若者が少ないということもあるだろう。メスナーが今回利用している要塞施設にしても、不要となっ

た軍の施設をイタリア政府が彼に提供したということにもなる。

地動説を説いて教会から破門されたガリレオが教鞭をとっていた、自由で進取的な学風があるとされるパドヴァ大学で学んだメスナーである。体力の衰えを感じているメスナーは、東洋の日本では許されそうにない環境の中、相変わらず既存の登山記録更新に励む登山者を睥睨しながら、山そのものの思索を深めているように思える。

名誉会員でない三先輩

山本健一郎

以前、藤島敏男さん、深田久弥さんの話をしたところ、若い女性会員に「木暮さんと山に登ったこともありませんか」と聞かれた。私を明治大正生まれと思っているのですか、と言いたいのをこらえ「木暮さんは会長在任中の昭和19年5月、総会の直前に亡くなられ、副会長の横さんが後を継がれたと聞きました。私はその時、国民学校の5年生、残念ですが木暮さんの山のお供はしたことがあり

ません。私は貴方が思っているより遥かに若いのです」と答えた。

その木暮さんが名誉会員に推されていないことを知る人は多くないようだ。数年前、新しい会員名簿を開いたところ、物故された名誉会員のリストが目に入った。名前と会員番号、それに入会年月などが載っているが、発起人の方の入会年月欄には日付でなく発起人と記されている事に、なるほどと思いついて見ているが、会員番号6番の方が載っていないのに気づいた。6番は梅沢親光さんだった。それでは歴代の会長はと調べたら、木暮理太郎さんと別宮貞俊さんが名誉会員になられていないのを発見した。

当会の生き字引であつた望月達夫さんにお伺いしたら、梅沢さんについてはどういう事情があつたか知らないが、木暮さんと別宮さんは会長在任中に亡くなられており、会長職を退かれてから名誉会員に推挙する習わしのため洩れてしまったのだらうと教えられた。そして「木暮さんが名誉会員でないのに、私が名誉会員では何となく居心地が悪いね。100周年のような機会に名誉会員に推しても

いいかな」とおっしゃった。

その後、織内さんにこの話をしたら「君、木暮さんの値打ちが名誉会員であつてもなくても変わらない。気にするほどのことではない」と一刀両断にされてしまった。いかにもお二人の人物を反映したご意見と記憶しているが、お二人とも100周年を前に鬼籍に入られてしまった。

100年の歴史を誇る当会の先輩方の中に、事情あつて名誉会員に推されていない3人の方がおられる事なども記憶にとどめていたきたい。

南海に聳える4,000メートル峰へ登る

マレーシア最高峰Mt.キナバル登頂
5日間・6日間 東京・大阪・名古屋・福岡発着

●旅行代金: ¥142,000~¥242,000

●出発日: 1/28・2/4・2/25・3/4・3/18・3/25・

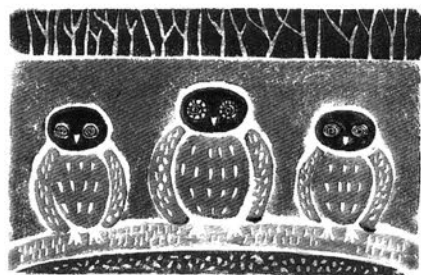
4/8・4/29・5/3・5/20・5/27・6/10・6/15・6/29

 **アルパインツアーサービス株式会社**

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

『目で見る日本登山史』

山と溪谷社・編



2005年11月
山と溪谷社刊
『目で見る日本登山史』352頁
『日本登山史年表』271頁
定価8190円

『目で見る日本登山史』と『日本登山史年表』の2冊からなり、江戸後期から本年までが収められている。どちらも類書を見ない。

前者は、時代を大きく4つの部に区切り、それを26の章でくくっている。章の切り口は「大正登山ブーム」とか、「昭和前期の登山事情と出版」などユニークなものも

ある。総説によると原資料を重視し、記録を発掘する方針との説明がなされる。各部の文頭にはほどよい長さの時代解説があつて、大きな流れを理解させる。本書の編纂は、登山史に幅広い蘊蓄を持つ編者に負うところが大きい。

たぶん、まず骨格づくりのあと、必要な写真の収集になったことだろう。文字ならコピーでもできる。その苦労は、巻末の写真提供者の数を知れば納得する。探し出すことを考えても、気が遠くなつてしまう。ビジュアルという点では、見るだけでも楽しめる。しかし、写真はそれほどまでに真実を語り、歴史的価値で読者に迫る。全ページが2色刷りで、写真の濃淡も強調された。

ひとつだけ、77ページの日本山岳会発起人の説明は、左右を入れ替えた方がよかったと思う。

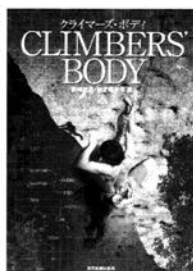
『登山史年表』の方も、よく拾い上げたものである。日本全国と海外遠征だから、その量の膨大さは執念ともいえる。労作程度の言葉では、とてもいい尽くせるような範囲ではない。本格的な1書である。「昭和(戦後)」編のバリエーション開拓や、「海外」編の遠征登

山などは、年次を追うことで筆者でもわかりやすい。登山史の基幹文献として、重用されることを疑わない。

(三井嘉雄)

菊地敏之・前之園多幸・著

『クライマーズ・ボディ』



2005年7月
東京新聞出版局刊
A5版 192頁
定価1785円

従来、フリークライミングに最も効果のあるトレーニング方法は、クライミングそのものをするものであるといわれている。確かに、その通りであろう。しかし、より高きを目指してひたすら登り続け、能力のプラトーをいつまでもたつても突き破ることができなかつたり、クライミング特有の手指や肩のスポーツ障害等にかかり、悩むことはよくあることだ。

この本は、こんなトラップに落ち込むのをできるだけ避け、より高い安定したクライミングの能力をどのようにして獲得するかに込めている本である。

プロローグは、今もなおこの世界でスーパースターとして君臨し続けている平山ユージとの対談から始まる。ここでは難度の高い挑戦をする前の、彼のトレーニングやコンデショニングの方法が語られている。トレーニングの量に関してはとても及ぶところではないが、根底にある考え方などは一般のクライマーにも参考になる。

本文は3部に分かれており、第1部では、トレーニングの方法やその意義を理解する上に必要な筋肉と、働きについての解説がされている。その内容は、プロのトレーナーや理学療法士が学ぶのと同程度の高いレベルとなっている。

第2部では、クライミングをスポーツと考えたとき、その特性を分析し、どのようなトレーニングが有用かの説明をしている。いわば、急がば回れのステップアッププログラムの考え方である。人工壁での重視すべき課題や、その取り組み方などに触れている。

第3部では、クライミングによるスポーツ障害について、クライミングの豊富な経験をもつ整形外科医の前之園多幸が担当している。外傷学の基礎、障害が起こりやす

い部位の解剖学など、ここでも理解に必要な基礎知識の解説から始まっている。障害が起きるメカニズムと、それを起こしやすいムーブとの関係などは、クライミングをよく知る整形外科医でなければ記述できないところである。さらに障害を如何に予防するか、応急処置、医者へのかかり方などにも触れている。

(伊藤英弘)

『四度目のエベレスト』

村口徳行・著



2005年7月
小学館 221頁
文庫判 定価680円

ドキュメンタリー番組で、クライミングシーンを見ながらふと思う。これを撮影しているカメラマンって、どんな人なんだろう。

著者は、その映像カメラマンの村口徳行。4度のエヴェレスト登頂は日本人で最多。渡邊玉枝、三浦雄一郎両氏のエヴェレスト登頂への同行で大いに注目された。

大学山岳部在部中、8ミリフィルムで登頂記録を撮ることに熱中。

卒業後はフリーのカメラマンになる。時間が自由で、山の撮影でトレーニングもできると考えたからだ。

初めてのヒマラヤ、ヒマール・チュリでは、体調を崩し「あらゆる気力がウンコと一緒に流れてしまう」さんざんな体験を味わう。ドキュメンタリー「チョモランマの渚」の撮影中には、イエローバンドで化石を探すうちに登頂してしまう。などなど、生き生きとした言葉でエピソードが語られる。

「どうした?」「頂上についてしまいました」のやりとりの場面では吹き出してしまふ。なんだか「高所カメラマン青春記」といったふうだ。

一方、仕事の場としての山は、「もう一度お願いします」が通用しない世界。「登れなかったので撮れませんでした」では話にならない。特殊で厳しい世界であることが改めて実感させられる。

書き下ろしの文庫本なのも、若い読者には手頃。ジーンズのポケットにでも入れて読んで欲しいと、著者も思っているのではないか。

(三好まき子)

会務報告

11月理事会

日時 11月9日 18時30分～20時
場所 日本山岳会会議室

「出席者」 平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・渡邊・石橋・古野各理事、一力・山本監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

●議事に先立ち、平山会長より創立100周年記念式典・祝賀晩餐会を滞りなく終了できたことに對し、関係者の努力に感謝する旨の挨拶があった。

【監査報告】

一力監事より、11月8日に実施された平成17年度上半期の監査について、おおむね適正に執行されている旨の報告があった。

【審議事項】

- 1 創立100周年記念事業関連
- (1) 収入状況 (17年9月末現在)
● 8127万3704円
(内募金6394万5229円)
- (2) 財務状況 (17年9月末現在)
● 総支出 3934万7366円

- 10月繰越金 4192万6338円

- (3) 今後の事業展開等について
- ① 百年史の発行

10月26日の常務理事会において百年史刊行委員会の松田雄一委員長より進捗状況、経費見込み、配布についての委員会の意向等を聴取した。結果、2006年5月の発行を見込み、配布方法については委員会の意向を重視し、11月10日開催予定の記念事業委員会の意見を聞き、総合的に勘案し、12月理事会において決定することとした。

- ② 第2回記念フォーラムの開催

2006年2月11日(土)、日本青年会館において「日本山岳会と登山の未来に向けて」をテーマとした講演とパネルディスカッションを予定。

- ③ 英文ジャーナルは予定通り発行
- ④ 中央分水嶺関連報告書の発行

2006年に踏査が完了する。予算にしたがって報告書を発行する。

- ⑤ 学生部・海外遠征計画

2006年8月～10月、ネパール・ヒマラヤ、マナスル山群のパンバリ・ヒマールへの遠征が計画

されている。予算の範囲内で応援することとした。

⑥決算について

2006年にすべての事業が終了する見込みのため、2007年(平成19年)度の総会において、決算報告をする予定。なお、2006年度の総会においては中間決算とする。

2 10月常務理事会検討事項についての報告

(1) 定款改定

組織改革に伴い、平成19年度からの実施を目指した理事および評議員の定数にかかる定款改定を検討する。今後検討を重ね、平成18年度総会に提案することとした。

(2) 名誉会員推薦規定改定

「名誉会員推薦に関する内規」について名誉会員候補の推薦者の規定等に不備が指摘されているため、全体的な手続きを含む見直しを行ない、2006年度における推薦に適應できるようにすることとした。

(3) 2006年2月支部長会議

支部活性化を図る観点から、地方開催を検討することとした。

(4) マナスル初登頂50周年記念事業

① 2006年5月9日 記念レセ

プシヨン(カトマンズでネパール山岳協会主催)

②「記念トレッキング」を実施

(会報「山」1月号に詳細を掲載し、参加者を募集する)

③ マナスル・デー企画

2006年は日本・ネパール国交樹立50周年に当たる。その記念行事の中にマナスル・デーの企画があるため、これに参加する。

④ マナスル登山計画

橋本副会長から前向きに検討中である旨の報告があった。

⑤ 本会内における公募的海外登山について

常務理事会において、会員が公募登山に参加することについては一切関知しないが、本会の役員が主導して本会内において参加者を募集する公募的海外登山については、今後、自粛する方向とし、本会の「冠」を付すことに慎重であるべきとの意向が集約された旨の報告があった。今後継続して検討することとした。

⑥ ルーム改装とサロン化について

● 104号室の改装Ⅱ3つの会議室に改装することとし、1月中旬に工事を完了させたい。

● 集会室のサロン化Ⅱ改装後の1

04号室および賃借している201号室の利用状況を勘案しつつ、各方面の意見を徴し、できるだけ早い時期に方針を決定することとした。

⑦ 青年部の扱い

現在、「日本山岳会青年部」として団体会員になっている。そのため、委員会としての青年部と区別がつきにくく、ルームの利用、予算の執行についての問題が生じている。近日中午に委員長から事情を聴取し、改善策を検討することとした。

3 日本山岳レスキュー協議会・

山岳事故調査への参加

9月理事会に引き続き検討したが、事故情報の把握方法、個人情報保護との関連、本会の山岳傷害保険との関連に不明確な面が見られるので、参加は見送るとの意見が大勢であったが、再度、指導委員会の意見を徴することとした。

4 中村保会員の海外講演補助について

11月30～12月1日、英国山岳会

およびデンマーク山岳会において講演。渡航費の一部を補助することとした。

(承認)

【報告事項】

各担当より、次の件が報告された。

① 10月16日 記念式典への海外招待者エクスカージョン (吉永)

バスにて日光に案内、東照宮・日光博物館 (旧田母沢御用邸) を見学、栃木県教育委員会の協力もあり、好評であった。

② 10月29・30日 東海ブロック式典 (名古屋市中平山会長)

● 全国より186名が参加、盛大

に行なわれた。

③ 11月5・6日 関西ブロック式典 (高野山で平林副会長)

● 全国より140名余りが参加、盛大に行なわれた。

④ 11月、NHK海外ラジオ放送の英語による100周年関連取材

⑤ パキスタン大地震救援募金について

⑥ 10月新入会員は6名、復活会員は1名

「100周年記念シンポジウム」のご案内 日本山岳会のこれからを考える 第2回

記念フォーラム委員会

- 開催日 2006年2月11日(土)午後2時～8時(開場1時30分)
- テーマ 「日本山岳会と登山の未来に向けて」
 - 基調講演Ⅰ 竹内洋岳「私のヒマラヤ登山—HAMスタイル—」
 - 基調講演Ⅱ 中村 保「ヒマラヤのアルプス」
 - パネルディスカッション 「こんな山登りがしたいこんな日本山岳会にしたい」
- コーディネーター 重廣恒夫
- パネリスト 谷川太郎ほか若手委員、会員を予定
- 会場 日本青年会館501号会議室 (TEL 03-3401-0101)
(JR千駄ヶ谷駅から徒歩9分、地下鉄銀座線「外苑前」・大江戸線「国立競技場」から徒歩7分)
- 定員 120名 (入場無料)
- 申込み・問合せ 1月31日までに氏名、会員番号、連絡先を記入して、FAX、メールで、フォーラム委員会 河野吏までお申込みください。
(FAX 048-256-8606、E omkawano@dolphin.ocn.ne.jp)
- 懇親会 講演会終了後に懇親会を予定しています(午後8時～9時)。参加希望者は1月31日までに併せてお申込みください。

ルーム日誌

11月

1日	図書委員会 資料委員会
2日	アルパインスケッチクラブ
3日	事業委員会
4日	資料映像委員会
5日	総務委員会
6日	フォトビデオクラブ
7日	理事会
8日	創立100周年記念事業委員会 学生部
9日	各委員会委員長・同好会代表者会議
10日	総務委員会 高尾の森実行委員会
11日	百年史委員会 山研運営委員会
12日	図書委員会 高尾の森実行委員会
13日	100周年記念事業フォーラム委員会
14日	新入会員オリエンテーション
15日	資料映像委員会 山想倶楽部
16日	フォトビデオクラブ 00会
17日	自然保護委員会
18日	マナスル委員会
19日	ゆきわり会
20日	インターネット委員会
21日	常務理事会
22日	11月来室者428名

● 会員異動 (11月)

小林治俊 (8625) 05・9・5

廣瀬 誠 (5575)	05・10・10
伊藤 祐道 (6239)	05・10・10
飯島 齊 (7359)	05・10・10
泉尾 忠 (2020)	05・11・15
菅野時子 (7281)	
桜井克己 (11511)	静岡
鶴岡 慶 (11716)	
寺崎輝夫 (13254)	福井

◆ 編集後記 ◆

● 100周年の記念行事も一段落。そのまともを、巻頭で平林副会長にお願いました。

● 新人会員の方たちのオリエンテーションに参加しました。皆さん、真剣にガイダンスを受けていたのが印象的でした。登山歴もさまざまなら、入会の動機もバラエティに富んだ方たちで、今後の山岳会での活動が楽しみです。
● 12月は強い寒波に襲われました。十分に気をつけて、雪山を楽しんで下さい。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 727号

2005年(平成17年)12月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社